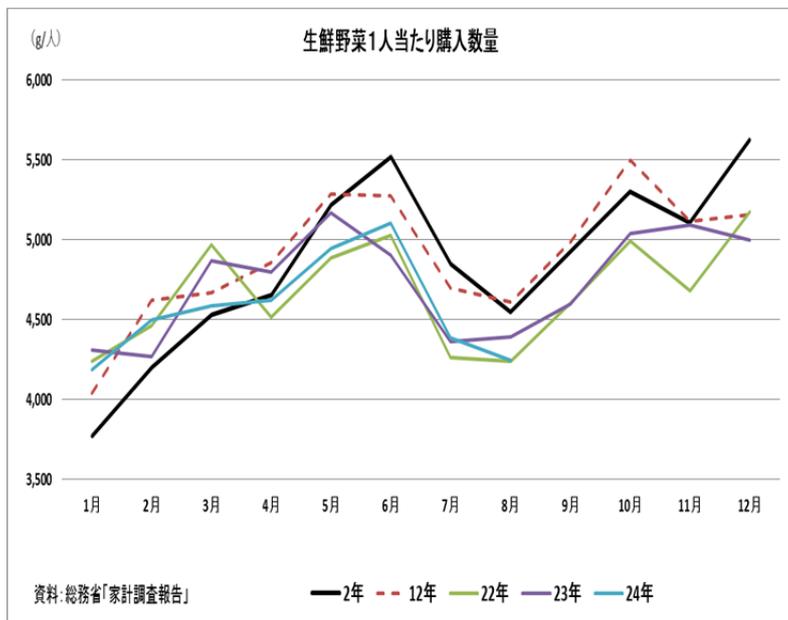


野菜の需給・価格をめぐる状況

1 生鮮野菜の購入数量の推移

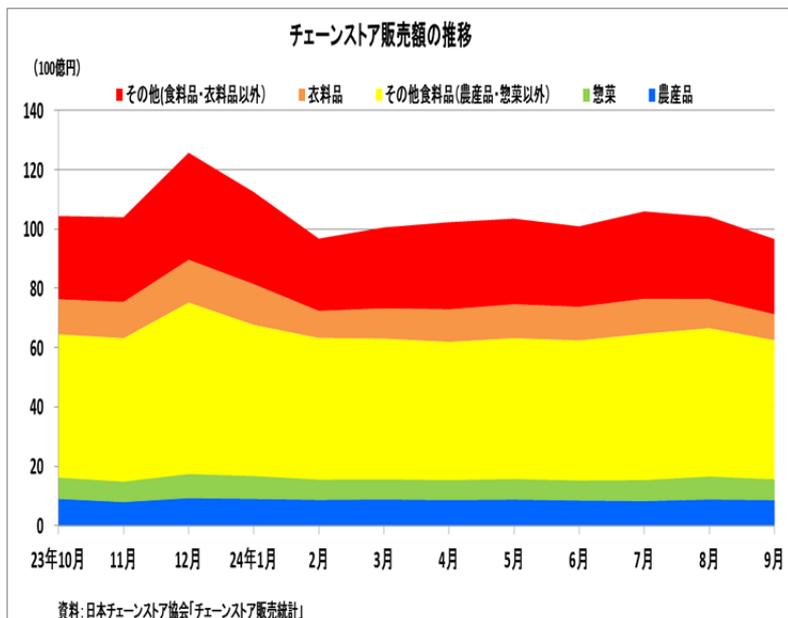


生鮮野菜の1人当たり購入数量は、平成23年は、生育が良く、野菜の価格が概ね前年を下回ったことから、前年を上回る月が多かった。3月については、震災による需要の減退から、購入数量は前年を下回った。

平成24年は、平成23年12月からの低温・曇天の影響により総体的に高値となったことから、2月及び6月を除いて前年を下回って推移している。2月及び6月については、前年が低温・少雨の影響で高く、購入数量が少なかったことから、前年を上回った。

2 チェーンストアの販売動向

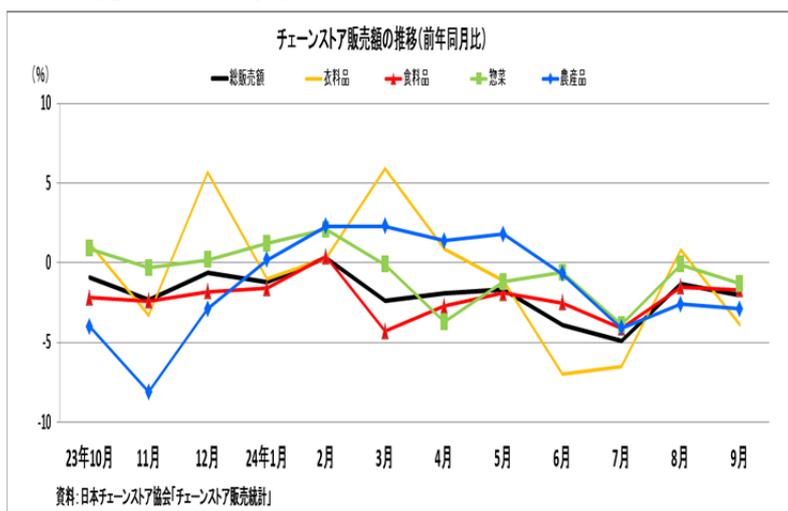
(1) 販売額の推移



チェーンストアの総販売額の最低額は、9月の9,665億円、最高額は、12月の1兆2,574億円であった。

そのうち、惣菜の最低額は、6月の661億円、最高額は、12月の798億円であった。また、農産品の最低額は、11月の809億円、最高額は、12月の942億円であった。惣菜、農産品それぞれ、その他の食料品に比べて月ごとの大きな変動がなく、推移した。

(2) 販売額の前年同月比

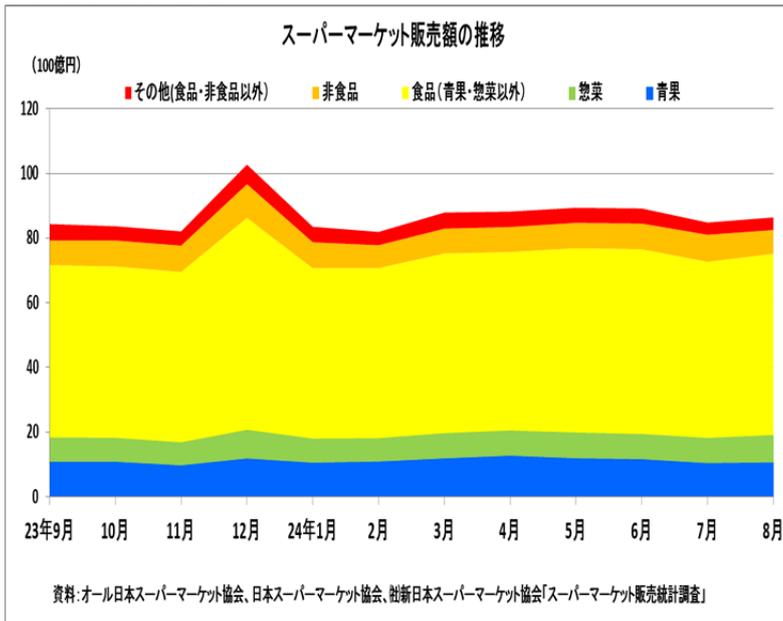


チェーンストアの総販売額は、平成23年10月以降、2月を除き、前年を下回って推移した。

そのうち、惣菜は、概ね前年並みで推移したが、台風や低温等の影響により、4月以降は、8月を除き前年を下回った。農産品は、1月以降、低温等の影響により小売価格が上昇したものの、6月以降は、野菜の相場安等により前年を下回って推移した。

3 スーパーマーケットの販売動向

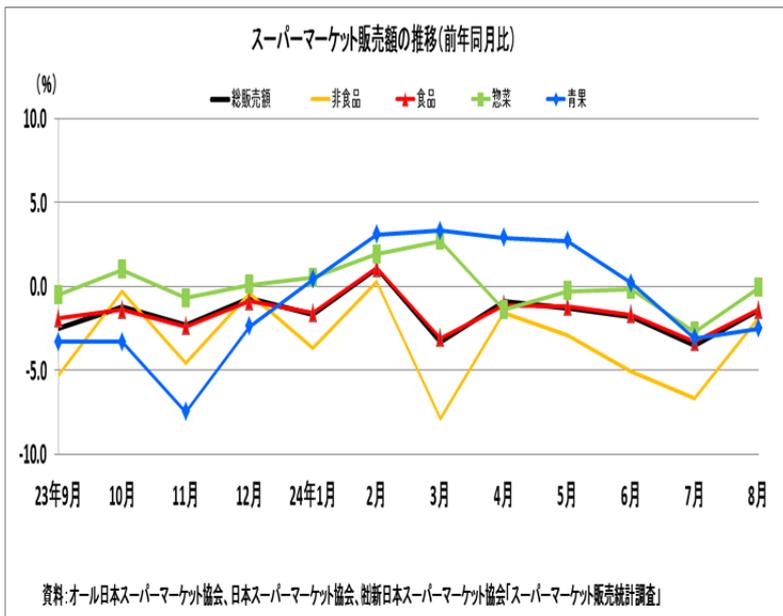
(1) 販売額の推移



スーパーマーケットの総販売額の最低額は、2月の8,191億円、最高額は、12月の1兆273億円であった。

惣菜の最低額は、6月の699億円、最高額は、12月の874億円であった。また、青果の最低額は、11月の985億円、最高額は、12月の1,286億円であった。

(2) 販売額の前年同月比

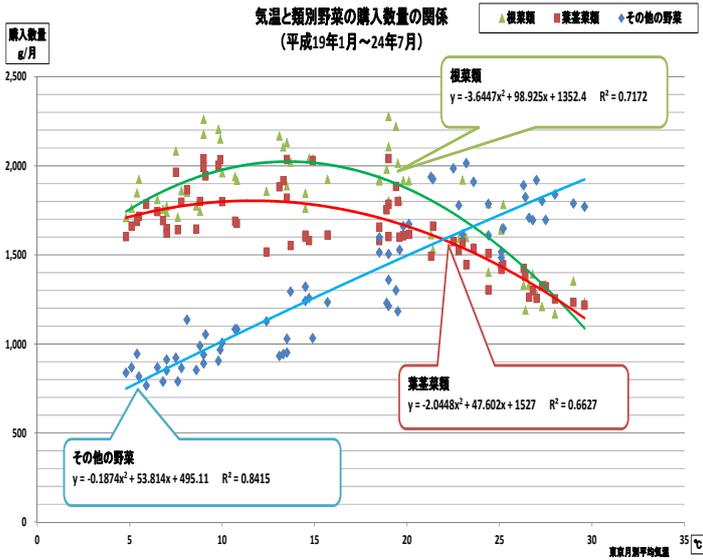


スーパーマーケットの総販売額は、平成23年9月以降、チェーンストアと同様、2月を除き、前年を下回って推移した。

惣菜は、概ね前年並みで推移した。また、青果は、9月以降、小売価格が低下したこともあり、前年を下回って推移していたが、1月以降は、低温等の影響により小売価格が上昇したため、前年を上回って推移した。7月以降は、チェーンストア同様野菜の相場安等により前年を下回った。

4 気温と野菜の消費との関係

～野菜の需給・価格動向レポート(平成24年9月18日版)より～



今年は、二十四節気で暑さがおさまるところとされる「処暑(しよしよ)」を過ぎててもなお厳しい残暑が続いている。「猛暑で野菜の消費が減少している。」と言われているが、気温は、野菜の生産はもちろん、野菜の消費にも影響を与えている。

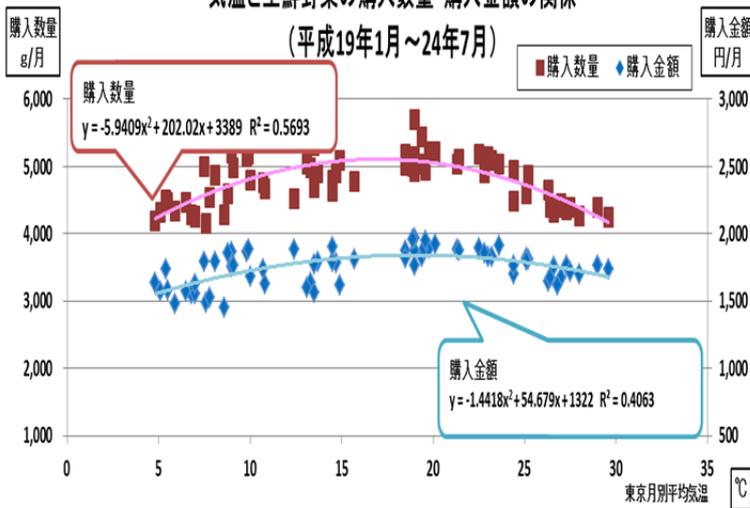
大消費地である東京の平均気温と、家庭での生鮮野菜の購入数量や購入金額の関係を見ると、気温が高くなるにつれて購入数量、購入金額とも増加するが、一定の気温よりも高くなると、いずれも減少している。

このうち、購入数量について、葉茎菜類、根菜類とその他の野菜に分けて見ると、葉茎菜類と根菜類は、一定の気温よりも高くなると、購入数量が減少する。特に、根菜類はその程度が大きい。根菜類は煮炊き調理が多く、暑くなると特に敬遠されるようになるのではないかと考えられる。

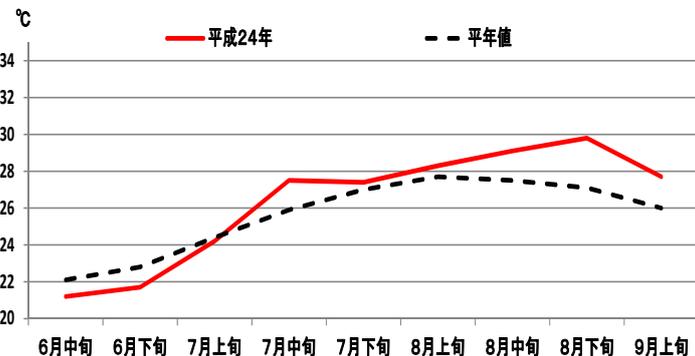
一方、その他の野菜は、気温が高くなると購入数量が増加し、葉茎菜類や根菜類と違った傾向を示している。果菜類やかぼちゃが夏野菜として旬を感じられることや、トマトやきゅうりがサラダ等として非加熱調理で食べられることが、暑い中でも需要をけん引しているのではないかと考えられる。

今年の夏の東京の平均気温は、例えば8月が平年に比べて1.7℃高いなど、高めに推移しており、このことが葉茎菜類や根菜類の購入数量の減少に拍車をかけ、キャベツやはくさい等の価格の低下の要因のひとつとなつたのではないかと考えられる。

気温と生鮮野菜の購入数量・購入金額の関係
(平成19年1月～24年7月)



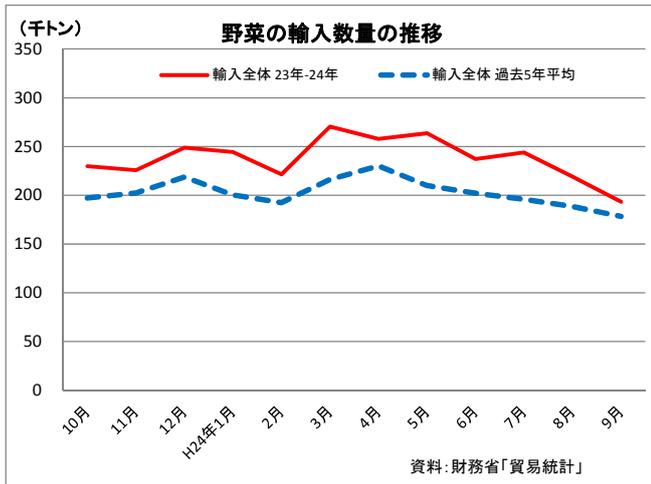
東京における旬別平均気温の推移
(平成24年6月中旬～9月上旬)



資料：ベジ探(原資料)「気象庁」

5 野菜の輸入動向

(1) 野菜全体の輸入数量

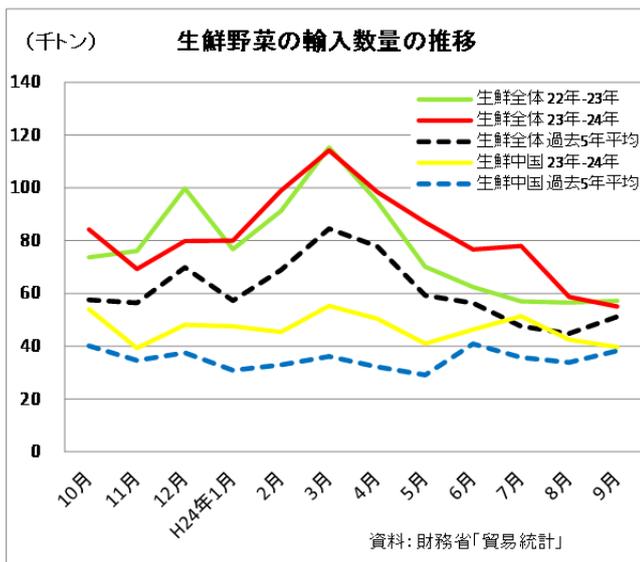


野菜の輸入数量は、全期間を通じて過去5年平均を上回った。

年明け以降、低温や干ばつ等による国内産の供給不足により、葉物野菜を中心に輸入野菜の需要が高まった。

平成24年3月以降は、250千トンを超える輸入数量となっていたが、6月に入ると、国内産の生育が回復し、価格も全体的に安くなったことから、徐々に輸入量も減少傾向となり、9月は200千トンを下回った。

(2) 生鮮野菜の輸入数量

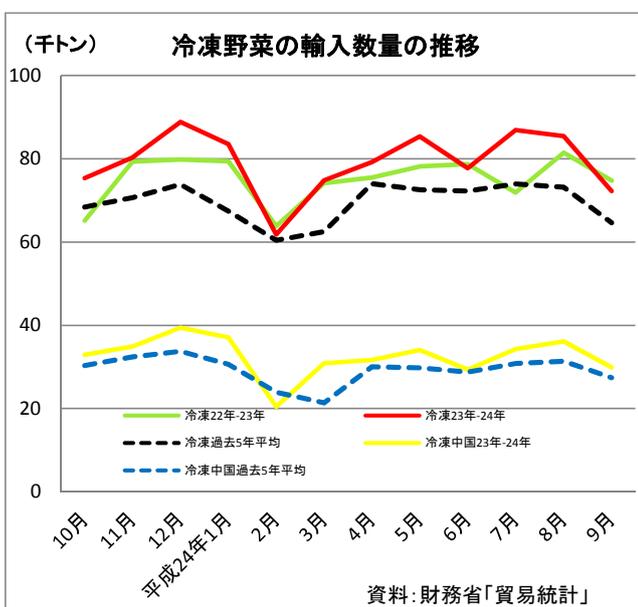


生鮮野菜の輸入数量は、全期間を通じて過去5年平均を上回った。

特に平成23年12月以降は、低温や干ばつ等によりキャベツや結球レタスを中心とした国産葉茎菜類の出回りが少なくなったことから、過去5年平均を大きく上回った。また、府県産のたまねぎの不作から、平成24年5月以降も前年を大幅に上回って推移したが、8月以降、猛暑の影響による国産価格の低落から、前年並みとなった。

天候不順による加工・業務用野菜への供給不足や低価格志向の強まり等から、再び中国産への需要が高まっており、中国産の輸入数量は、全期間を通じて過去5年平均を上回り、特に12月から5月までは、過去5年平均を大幅に上回った。

(3) 冷凍野菜の輸入数量



冷凍野菜の輸入数量は、全期間を通じて過去5年平均を上回った。

2月の輸入量が前月と比べて大きく減少したのは、平成23年8月から平成24年1月まで輸入量が多く、業者が多く、在庫をかかえていたために、在庫調整がなされたのではないかと推察される。3月以降は、過剰在庫も解消され、平年を大幅に上回り推移した。

中国産の輸入数量は、2月を除き過去5年平均を上回った。これは、生鮮野菜と同様に廉価な中国産への需要が高いことによると思われる。

(4) 主要品目の輸入数量(平成23年)

生鮮野菜 (トン)	
①たまねぎ	373,123
②かぼちゃ	114,574
③にんじん・かぶ	80,059
④ねぎ	52,479
⑤ごぼう	45,569

冷凍野菜(トン)	
①ばれいしょ	361,202
②えだまめ	70,222
③スイートコーン	46,858
④さといも	38,781
⑤ほうれんそう等	33,443

資料:財務省「貿易統計」

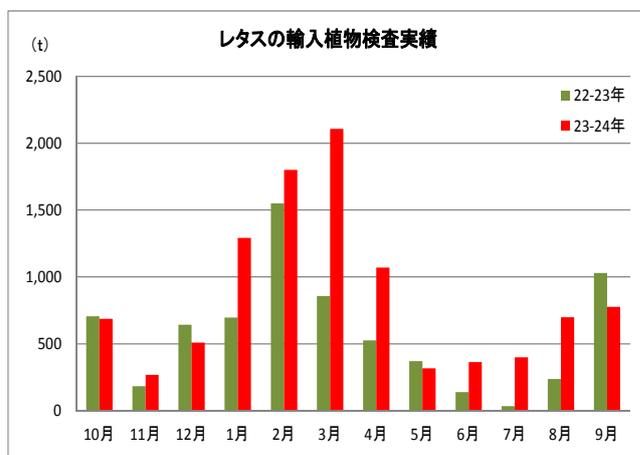
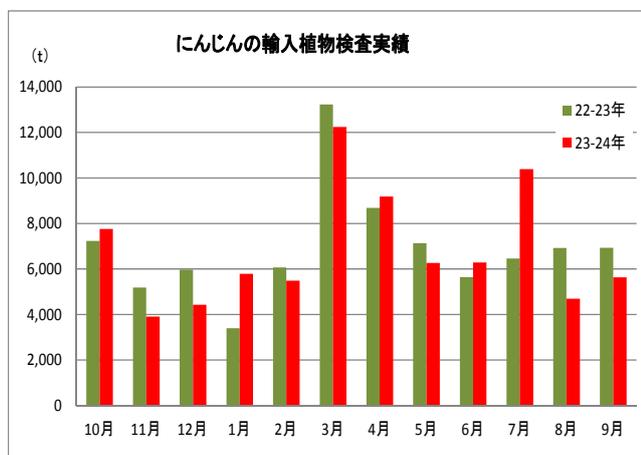
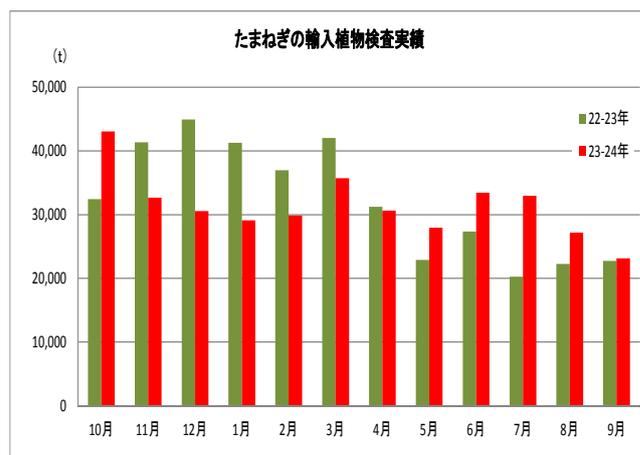
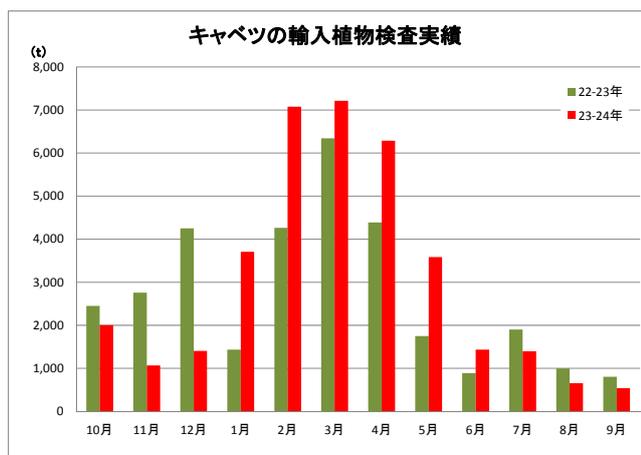
(5) 主要品目の植物防疫検査実績

キャベツの輸入検査実績は、低温等による国内産の供給不足の影響を受け、平成24年1月から3月まで増加した。4月以降、減少に転じたものの、6月までは前年を大きく上回る水準となった。7月以降は、国内産の豊作により前年を下回り推移した。

たまねぎは、一昨年の北海道産の不作を受け前年の輸入検査実績が多かったため、11月以降、前年を下回った。5月以降は、府県産の供給不足の影響を受け、前年を上回り推移しているが、北海道産の出荷が本格化する8月からは減少傾向となっている。

にんじんは、概ね前年に近い水準で推移したが、7月は、北海道産が残雪による定植作業の遅れの影響から出荷が少なくなったこと等により、前年を大幅に上回った。8月以降は、前年を下回り推移した。

レタスは、今年に入り、キャベツと同様に低温等による国内産の供給不足を受け、5月と9月を除き前年を大幅に上回った。



※品目によって縦軸の数量の数値に大小があるのでご注意ください。

資料:農畜産業振興機構「ベジ探」

原資料:農林水産省「植物検疫統計」